

水俣病・二つの約束・



平野 和弘（埼玉支部 駿河台大学）

1 水俣病のわけ—二つの約束

授業で水俣病に取り組んで35年になります。高校教員時代の保健の授業、そして今は、大学で教科教育法の講義とゼミで水俣に向き合い続けています。これには二つの理由があるのです。そして、この理由はきっと「いい授業をしたい」と願っている全国の先生方と共有できるし、今回の講座でたくさんの宝を見つけてもらえるかと確信しています。

1つめの理由は、私自身の課題です。水俣との約束とでも言ったらいいのかもしれません。その約束の裏側には、「見てみぬふりをする」ことができない水俣の現状が横たわっています。

2つめは、水俣そのものです。言い方を変えると、水俣には今どきの子どもたちに教える中身がたくさん詰まっているのです。つまり、教師である私側と、子どもたち側から眺めたら、水俣は学校できちんと教えるべきで、教えると子どもたちはよく考えてくれるということなのです。

2 私自身の課題—伝える—

今年9月、私は水俣にいました。学生12人と社会人2人（1人は大阪支部の上野山さん）と、太鼓集団響3人、総

勢18人。患者支援の方々の言葉を聞き取り、街巡りをし、毎晩の振り返り、患者さんたちとも交流も含め、水俣に深くかかわることができました。

33年前、初めて水俣にやってきました。生徒の水俣病に関する質問にきちんと答えたいという真面目な思いと、高校教員の仕事にきちんと向き合えない自分にイラついていた私は、最後の晩、「ここにいたい」と患者支援をしている方々に伝えたのでした。そこで返されたのが、「せっかく水俣に来てくれたのなら、埼玉で水俣を伝え続けてください。世界が見えますから」。この言葉に感動し教師を続け、その後、同志会に出会い、大学に職を得て今の私があります。

ゼミ合宿最後の振り返り、学生たちが口々にする真剣な水俣の学びの成果を聴きながら私は心が震えていました。かつて定時制の生徒たちを沖縄に連れていき、ガマに入り、体験者の言葉を聞き取り、振り返りをしていた時と同じ感覚。人の心に届く対象との出会い。そして、「学び」が人とつながる実感。卒論のテーマとして「水俣」を選ぶ学生も出てきました。彼らは水俣を過去のこととはしていません。今の問題なのです。

水俣病を世界に知らせた写真家ユ一

ジン・スミスの生誕 100 周年記念写真集に、青柳は次の文章を寄せています。

「私たちに忘れることのできない衝撃を与えてくれたのが『水俣』に関する一連の作品である。日本社会全体が見て見ぬ振りをしてきたとき、水俣という現実が厳然とあることを私たちに突きつけてくれた」

見て見ぬふりはできません。それをそれぞれが引きとる。ここが水俣病を授業で取り上げる出発点です。

3 水俣自身の課題—共感を考えて—

一方、太鼓集団響と水俣。2012 年夏、響は全国を巡り太鼓を叩き続けていました。水俣の公演に取り組み、患者さんたちとの舞台も実現できました。水俣を離れるとき、舞台にも立っていただいた胎児性患者の鬼塚勇治さんにあいさつすると、「明水園」という言葉が出てきました。鬼塚さんたちが若者だったころ、「石川さゆりショー」を実現させたドキュメンタリーを埼玉で観ていました。ベッドで寝たきりの仲間たちへ、さゆりさんを会わせたいと明水園へ呼んだことが重なります。「明水園に来てもらいたいのだと」確信した私たちは、翌年も水俣を訪ね、そこで公演を模索したのですが、それは実現できませんでした。代わりに水俣市内にある患者さんたちの憩いの場所で鬼塚さんたちを招待してのミニコンサート。しかし彼はやってきませんでした。翌日、明水園にいる彼に会いに行くと、明らかに怒っています。果たせなかった約束は私たちの宿題として残りました。そしてこの夏、プロになった響は学生とともに 6 年ぶりに

水俣へ、約束の実現の準備のためにやってきたのでした。そしてこのミッションは 2020 年明水園公演として実現できることになったのです。患者さんたちの闘いの歴史が日本の環境行政を変えていったように時代の寵児としての彼らにはいます。でも彼らは今を生きています。日常過ごしています。それを理解するためにも、彼らの周りを、歴史を、そして水俣病そのものを知らなければならぬのです。平和学を構築したヨハン・ガルトゥングは「『共感(empathy)』とは、相手が現状をどう認識しているのか、どのような世界観を有しているのか理解する認知能力のことであり、自分や第三者の世界観を相手に押しつける態度の反対である。それは感情的な『同情(sympathy)』とは別物である」としています。水俣病の中身を知るということは、彼らとつながることにもなるのです。そしてそのつながるこちら側の課題や、問題や、苦しみが立ち現われ、自分自身をわかるということにもなるのです。

4 この講座の構成

この講座は、「宝子」の授業として私が長年取り組んでいる模擬授業を行わせていただき、そこから水俣病の教材としての価値を二つの面から切り取っていきたいと考えています。資料もたくさん用意します。時間内に消化できるか不安ですが、お土産はたくさん用意します。キーワードは「みんなで考えて答えを出す授業」です。

※報告及び参考文献は当日別紙資料配布